

〈論 文〉

日中韓の大学生の断り談話に関する一考察

キム ス ニム
金 順 任

キーワード：日韓対照研究、断り談話、謝罪の定型表現、断りの理由、提案

〈要旨〉

本稿では、日中韓3国の断りの過程における言語表現に注目し、日中韓でどのような類似点と相違点があるかをみた。分析の結果、謝罪の定型表現を日本と韓国の大学生は約1回使っているのに対し、中国の大学生は26.5%が謝罪の定型表現を1回も使っていなかった。さらに、断りの理由としては、日本は「用事・約束」が中国と韓国に比べ高く、中国は「テスト・授業」が、韓国は「願書作成」と「英語能力」が他言語に比べ高い結果となった。また、断った後の代案の種類をみると、日本は「次回」が約86%で、中国は「紹介」が約58%で、日中で大きな違いを見せていた。

This paper focused on refusal communication of Japanese, Chinese and Korean. As a result of analysis, while the college student of Japan and Korea were using the formula expression of apologizing about one time, but 26.5% of Chinese college student was not using the apologizing formula expression. Furthermore, as a reason of a refusal, Japan's "private promise" was higher than China and Korea. And in Korea, "application paper" and "English capability" are higher than other two languages. And the kind of alternative plan after refusing was Japan's "next time" was about 86%, and China was "introduction" is about 58%. It showed the big difference in Japanese and Chinese.

1. はじめに

日中韓3国は地理的にも歴史的にも深い関係を持っており、近年にも絶えず交流を行っている。しかし、互いの文化や言語に関する理解の不足で、様々な誤解やコミュニケーション摩擦が起こっているのも現状である。さらに、そのような事態が発生する場を取り巻く文化、あるいは関与している話者同士の間人間関係によって、その不快な状況の認識の仕方や処理の方法も国によって異なるものといえよう。

本稿では、断りの過程における言語表現に注目し、日中韓でどのような類似点と相違点があるかをみしてみる。一般的に断り談話を行う際は、断りを表す表現だけではなく、

人間関係を良好に保つための機能を持つ、付加的な表現も付け加えることなど、様々な戦略を用いることで、会話を円満に進行させているものといえる。本稿では日中韓3国における断り談話の特徴を明らかにすることにより、異文化に対する理解を深め、異文化間コミュニケーションに役立てたいと思う。

2. 先行研究

日中韓では80年代から異文化に対する理解や第二言語教育に役立つために、日中韓の対照研究が盛んに行われてきた。しかし、そのほとんどは日中韓のうちの2言語間の対照研究で、3国間の対照研究はあまりないといっても過言ではない。

断り談話に関しても2言語間の対照研究は多くなされていたが、3言語間の対照研究はそれほど多くはない。ここでは、先行研究を通して日中韓の断り談話の特徴を概観してみたいと思う。

まず、日中韓対照研究として、李威(1999)はDCTテストを通じて断り行為を意味公式(Semantic Formulas)の機能別に分類し、平均使用頻度や順序分析などを行った。李(1999)が提案した意味公式は不可、理由、詫び、感謝、代替案、関係維持、共感、挨拶、ためらいの表出で、断りの類型を詫び先行型、理由先行型、不可先行型、ためらい表出先行型、その他に分類した。その結果としては日中韓ともに詫び、理由、不可が多いと述べている。しかし、断り行為自体が「不可」を常に伴う言語行為であるのに、意味公式として「不可」を立てることは矛盾していると思う。また、李(1999)は具体的に理由の中身まではみていないので本稿ではそこを発展させたいと思う。さらに、李(1999)は、中国語は日本語に比べ、代替案をよく用いると指摘しているが、本稿の結果からも類似した結果が得られた。

次に、日韓対照研究として、元智恩(2002)は日本人95名、韓国人106名を対象に、指導教官から引越しの手伝いを頼まれたところを断る場面を設定し、日韓の断り談話を意味公式の配列順序によっていくつかのタイプに分類した。しかし、意味公式の分類が細かすぎるため、全体の傾向を把握することは難しいと思われる。

次に、本稿では断りの理由に関する分析も行うが、日本語とNZ英語の言い訳の対照研究を試みた西村(2007)から共通点を見出すことができた。西村(2007)は、日本語は「体調不良」や「忙しい」という言い訳が多く、NZ英語では「宿題が多い」という言い訳が多いが、日本語における「忙しい」は定着した常套句で、また日本人はNZ人より再勧誘をしないと指摘している。さらに、日本では言い訳が単に「断りへの記号」として作用し、NZでは実のある情報提示発話として断り発話の中で機能していると指摘している。

次に、大倉(2002)は日本人とメキシコ人の断り談話を分析し、「弁明+不可」が断り表現の中心構造を成していると指摘している。しかし、本稿ではマイナス的な「弁明」という用語より「断りの理由」という用語を用いることにする。

さらに、董青(2005)は日中の断り行動を、通常の意味公式による表現レベルでの研究ではな

く、「断り行動」(断る・断らない)に焦点を絞って分析し、日本人が中国人より断り行動が多いことを実証した。

以上で先行研究を概観したが、日中韓 3 言語間の対照研究はあまり行われておらず、また大量データに基づいた断り談話の具体的な内容に関する先行研究はないといっても過言ではない。本研究は外国語の学習において、最も基本といえる謝罪の定型表現の使用実態をはじめ、日中韓の断り談話の特徴を明らかにしたいと思う。

3. 調査概要

アンケート調査は日中韓の大学生を対象に行った。調査時期とインフォーマントの構成は表 1 の通りである。

表 1 インフォーマントの構成

	日本	中国	韓国
調査時	09年7月~10年5	09年4月~5月	09年5月~6月
男性	135(36.9%)	75(28.0%)	147(42.1%)
女性	230(62.8%)	165(61.6%)	202(57.9%)
不明	1(0.3%)	28(10.4%)	0(0%)
合計	366(100%)	268(100%)	349(100%)

本研究で調査対象を大学生にした理由としては、大学生が他の社会層に比べ、異文化に接触する機会が多いことと、大量データの収集が容易であるという二つの点があげられる。その根拠に関して簡単に説明しておこう。

近年の各国の大学には外国からの留学生が大勢いるため、大学生は日常的に外国人と接触する機会が多い。本研究の本来の目的は自国の言語使用に関する項目だけを調査するのではなく、接触場面での言語行動や他国のイメージに関する調査項目も含まれているため、異文化に接触する機会の多い大学生がより調査対象として適していると判断した。

次に、大量データの収集という観点からは多様な社会層を対象とし、日中韓の言語使用のメカニズムを明らかにすることが望ましいが、現実的には多様な社会層を対象とすることはかなり厳しいといえる。故に本研究では大学生だけに絞って調査を行った。

なお、本研究のための調査に協力してくれた日中韓の大学生はそれぞれ 414 名、380 名、416 名であるが、表 1 には本稿で分析する質問項目に自由記述式で回答した回答者のみの情報を示した。

全体的に 3 国ともに男性に比べ女性の割合が高い。一般的に上下関係や親疎差、男女差は言語使用に大いに影響を及ぼすと言われているが、本研究で設定した場面は、上下関係と親疎関係が一定しており、さらに男女差までみることが望ましいが、本研究は 3 国間の対照研究であるため、とりあえず男女差は無視し、言語間の違いに注目したいと思う。

調査は元々自分の目的を達成するまでの一連の言語行動過程の全体を調査したものである。具体的には挨拶→自己紹介→依頼→誉め→誉めに対する返答→勧誘→断り→謝罪→不満表明→釈明→感謝→挨拶、という一連の行動の連鎖である。本稿ではその一連の言語行動の連鎖のうち、断り場面だけに注目したものである。

アンケート調査票で用いた調査文は以下の通りである。

もし、あなたが実際に先生に向かって断るとしたら、どのように言って断ると思いますか。具体的に記入してください。

- ・指導教授：明日、留学生歓迎会があるんだけど、もし時間があったら案内係りをお願いできるかな。
- ・あなた：

4. 調査結果、及び考察

先生の要求に対し、断り行為を行う際は、通常先生の発話後、少し間をおいて「すみません」のような謝罪の定型表現を言った後、断る理由を述べ、さらに進んで代案を出すという流れが観察される。従って、以下では謝罪の定型表現、断りの理由、代案の提案という3つの観点から分析を行うことにする。

4.1 断り談話に用いられた謝罪の定型表現の使用

まずは、断る際に最初に定型的に使う謝罪表現についてみてみよう。表2と図1に示した。

表2 謝罪の定型表現の使用回数

回数	日本語		中国語		韓国語	
	回数	割合	回数	割合	回数	割合
0	38	10.4%	71	26.5%	63	18.1%
1	275	75.1%	171	63.8%	230	65.9%
2	50	13.7%	24	9.0%	54	15.5%
3	3	0.8%	2	0.7%	2	0.6%
合計	366	100%	268	100%	349	100%
平均	1.0492		0.8396		0.9857	

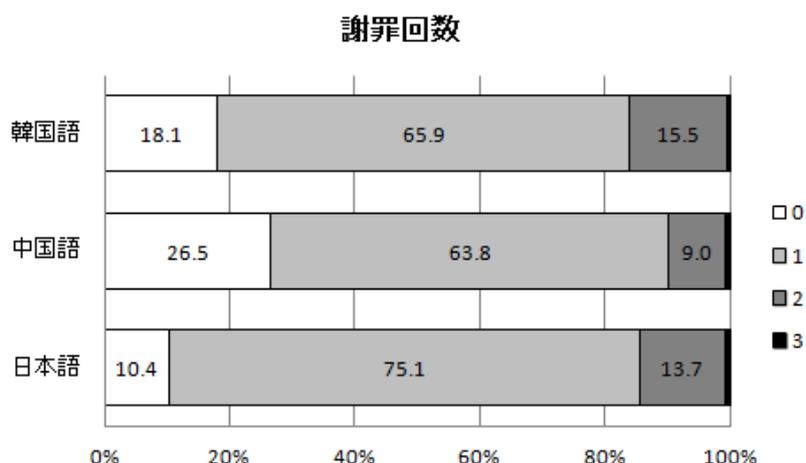


図1 謝罪の定型表現の使用回数

一人当たりの謝罪の定型表現の平均使用回数は、日本語(1.05)＞韓国語(0.98)＞中国語(0.83)の順で大体1回の謝罪の定型表現を用いることが分かった。日本人は感謝の時も、謝罪の時もよく謝罪の定型表現を使うと言われているため、日本語の方が中韓に比べ平均使用回数ももっと多いと予想したが、仮説とは違う結果となった。

さらに図1の国別の謝罪回数をみると、平均使用回数でも述べたように1回が圧倒的に多いが、特徴的なこととしては、中国語が謝罪の定型表現を使わない割合が26.5%で最も高いことであった。中国人はあまり謝らないと知られているが、今回の調査でも中国の大学生は断る妥当な理由があるなら、謝罪の表現を使わなくても失礼にならないと思う人が日韓に比べ多いようであった。以下に謝罪の定型表現が使われていない例文をあげておく。

日)明日はちょっと用事がつまっていて難しいかもしれません。

中)我家里有点事情。(wo jia li you dian shi qing、家に事情があります)

韓)내일은 시간이 없습니다. 다른 친구를 소개해 드리죠.

(nae ir eun si gan i eopt seup ni da da reun chin gu reur so gae hae deu ri jyo、
明日は時間がありません。他の友達を紹介致します。)

次は具体的にどのような定型表現が使われているかを表3に示した。

表3 日中韓の謝罪の定型表現の使用率

日本語			中国語			韓国語		
ごめんなさい	16	4.2	不好意思	86	38.6	中途終了型	49	14.3
すみません	170	44.6	对不起	77	34.5	죄송해요	40	11.7
申し訳ありません	144	37.8	抱歉	60	26.9	죄송합니다	254	74.1
申し訳ございません	51	13.4						
合計	381	100	合計	223	100	合計	343	100

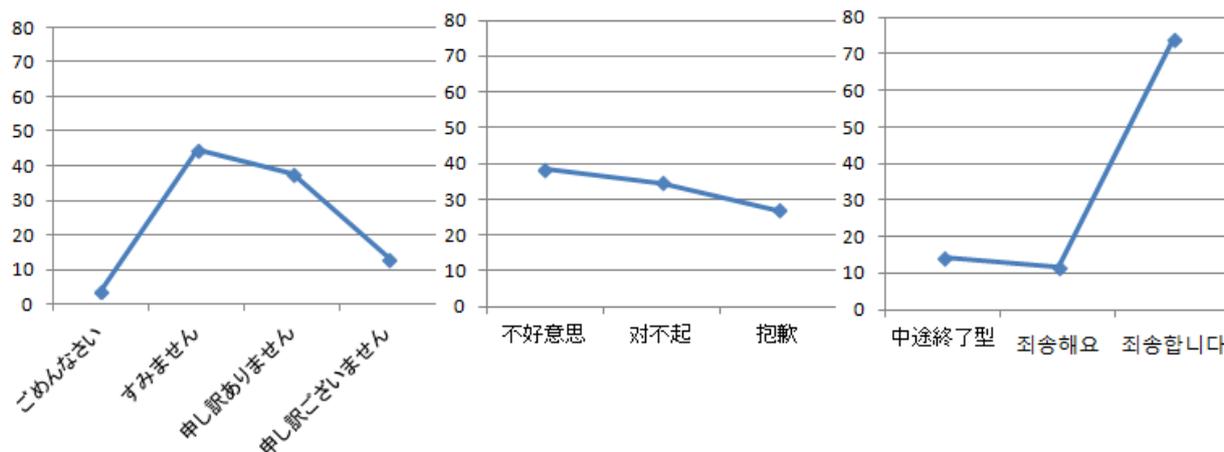


図2 日中韓の謝罪の定型表現の使用率

日本語の場合は「すみません」と「申し訳ありません」が半々使われていて、「申し訳ございません」と「ごめんなさい」は使用率が低く、前者の二つがほとんど定型的に使われていた。

次に中国語は「不好意思(bu hao yi si)」、「对不起(dui bu qi)」、「抱歉(bao qian)」の使用率の差がそれほど大きくなかった。前者の二つは日常会話で多く使われ、後者は改まった場面で使われることが多いとされている。特に「不好意思(bu hao yi si)」はささいなことに対して簡単にお詫びの気持ちを表す際に使われるものであるが、今回の調査では相手が大学の先生であるのにも関わらず多く使われている。残念ながら「不好意思(bu hao yi si)」と「对不起(dui bu qi)」の両者を社会言語学的な観点から分析した先行研究は管見の限りなく、そこで中国人の内省を聞いてみた結果、一昔前は「对不起(dui bu qi)」が多く使われていたが、近年になっては段々「不好意思(bu hao yi si)」の使用が増えているような印象があるという。今後両者の使用様相の変化に関するさらなる研究が必要であろう。

最後に韓国語の場合は、結果が単調でほとんどの人が「죄송합니다(joe song hap ni da)」を用いていた。「中途終了型」は文末の丁寧さを曖昧に終わらせたもので、「죄송해요(joe song hae yo)」は「죄송합니다(joe song hap ni da)」より丁寧度が低い表現であるが、要するに韓国語の場合はかなり改まった言い方を用いていることが分かる。このことから韓国における師弟関係を伺うことができる。なお、定型表現に関するより詳しい結果は金(2012)を参照されたい。

4.2 断りの理由

断りの理由として述べた内容は様々であるが、本稿では大きく3つに分けてみた。

- ①個人的な事情：用事、約束、英語能力、時間がない、アルバイトなど
- ②家庭の事情：家庭の用事、家族との約束など
- ③願書や学校関連：願書の作成、テスト、授業など

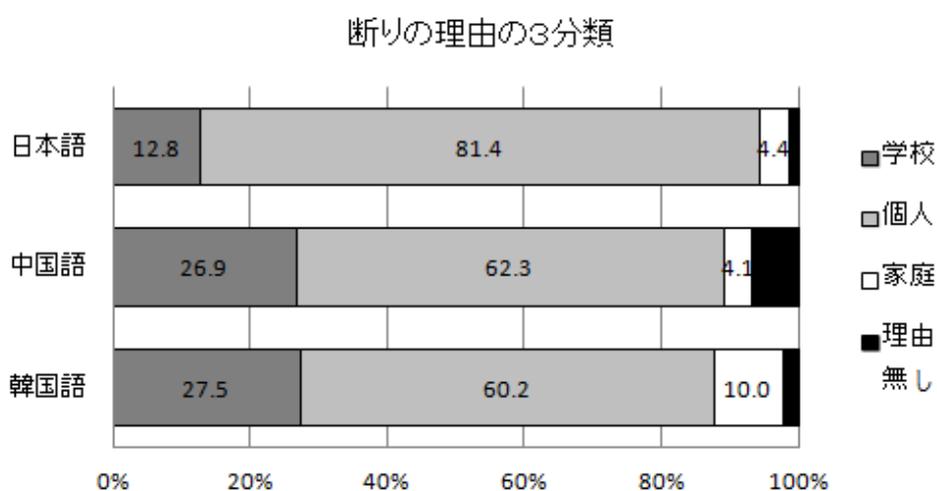


図3 断り談話の3分類

上記の図3をみると、中国語と韓国語が類似しており、日本語が若干異なる傾向をみせていることが分かる。すなわち、日本語は81.4%というほとんどの人が個人的な理由を先生に言うのに対し、中韓は個人的な理由が60%程度で、学校を理由としてあげる割合が日本語に比べずっと高い。中国と韓国では先生の頼みを個人的な理由で断ることは、妥当な理由ではなく、言い訳をしているかのように思われるかもしれないという危険性があると思われる。

以下では断りの理由をより具体的に分類し、日中韓でどんな違いがあるかをみてみよう。

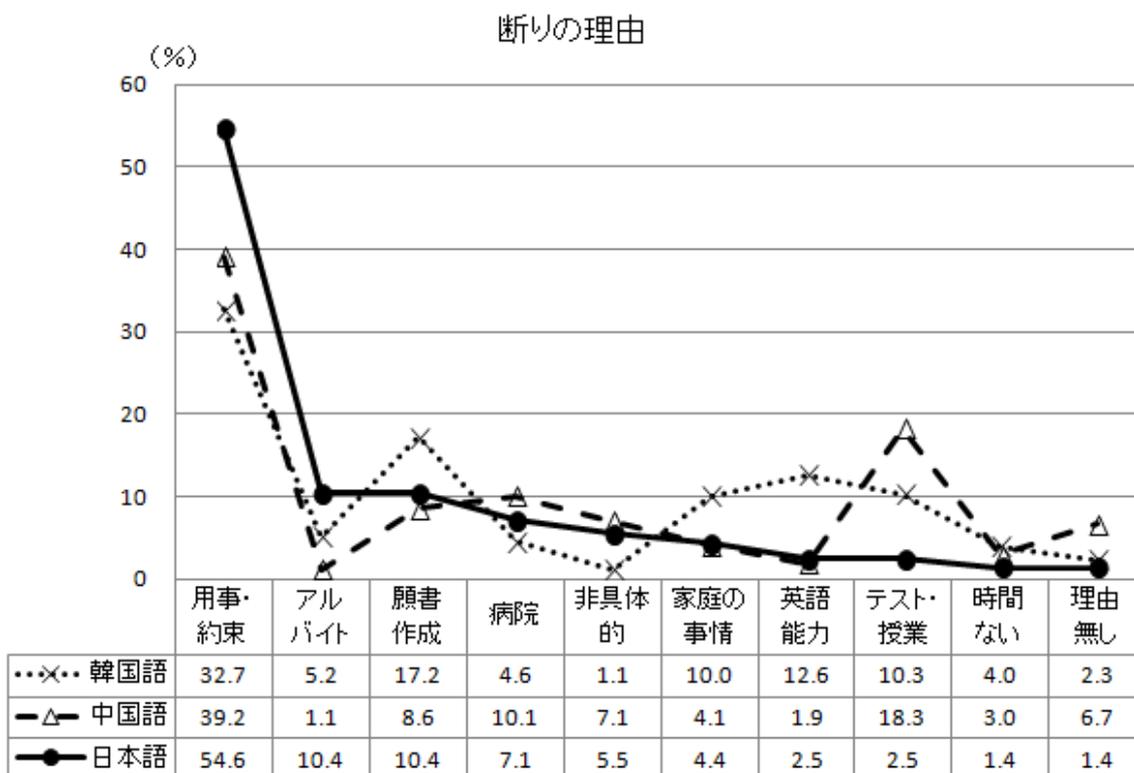


図4 日中韓の断りの理由

日中韓ともに、ただ単に「用事があります」とか「約束があります」のような若干漠然とした「用事・約束」が最も多く使われている。その中でも日本語は他の言語に比べかなり高い割合を占めている。また、次の日本語の特徴としては「アルバイト」が他言語に比べ高いことである。これは、日本が韓国や中国に比べ大学生のアルバイト率が高いことも原因になるかと思う。日本学生支援機構が行った平成22年度の調査結果をみると、37,151名のうち、73.1%がアルバイトをしているという。中国の場合は、中国社会科学院によると、大学1年生は13.5%、2、3年生は段々高くなって4年生は41.2%に達すると報告している。さらに、韓国の場合はアルバイト専門サイト(www.alba.co.kr)で行った調査結果をみると、53%がアルバイトをしているとされている。このように、日本の大学生のアルバイト率は中韓に比べ高いことが分かる。

次に、中国語の特徴としては2番目に高いのが「テスト・授業」で、日本と韓国に比べ高いことであろう。個人的な理由ではなく、学校を名分として立てることで、より妥当性を持たせられると思われる。

最後に韓国語の特徴は他の二国に比べ、「英語能力」が高いことだといえよう。韓国では英語が重視され英語コンプレックスを持っている人が多く、留学生歓迎会では当然英語能力が要求されるため、英語能力の不十分で断るといって、先生も仕方がないと思うかもしれないので、これを理由としてあげていると思われる。また、用事や約束などは変更の可能性もあって、先生により変更させられるかもしれないという危険性があるが、英語能力はすぐには身に付くものではない

ため、自分の理由を通せる確率が高くなるわけである。

以上をまとめると、日本人は実生活でも人のことについてあまり聞かない傾向があると思うが、断る際にも漠然とした理由を言って断っているのに対し、韓国人や中国人はより妥当的でより具体的な理由を言っていることが分かった。このように、どのような理由をあげるかという問題は、その国々の社会・文化的状況と密接に関わっているといえる。

4.3 代案の提示

次は自分が要求を断る代わりに、他の代案を先生に提案するかどうかという観点からの分析である。図5に示した。

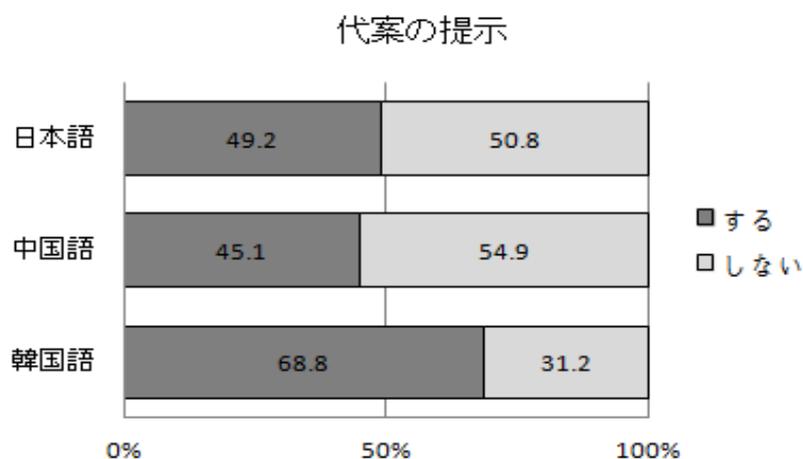


図5 代案の提示の有無

日本と中国は代案を提示する人としらない人が大体半々であるが、韓国の場合は代案を提示する人が代案を提示しない人の2倍にもなる。韓国では師弟関係が厳しいと言われ、先生の頼みを断るという行為に負担を感じ、できるだけ先生に被害を与えないように気を使っているものと判断される。

次は、どのような代案を提示しているかについてみてみよう。提案は大きく2つに分けることができた。1つ目は、今回はだめだけど次回は協力するというので、2つ目は、自分はだめであっても代わりに友人を紹介するというのだった。便宜上、前者を「次回」といい、後者を「紹介」といおう。以下の図6には代案を提示した人を100%にして計算しなおしたものである。

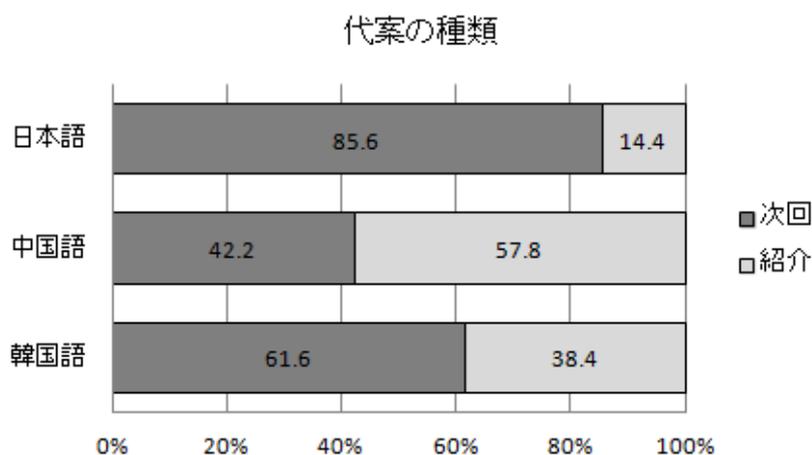


図6 代案の種類

図6から面白い結果が得られた。まず、日本語をみると、ほとんどの人が「次回」を約束して、「紹介」は14%に過ぎない。これは人に迷惑をかけたがらない日本人の本性がそのまま表われたものと思われる。「紹介」という行為は自分だけではなく、もう一人の第三者を巻き込ませることで、先生と自分との問題が、先生と自分、さらに友人という3者の問題になるわけである。故に日本人はそのような事態を作りたがらないのであろう。

これに対し、中国語は「紹介」が58%で、「次回」より16%程度高く、日本語と大きな違いを見せた。また、中国の大学生は友達を紹介する際に「友達に聞いてみます」のような友達の意向を聞くことはほとんどなく、以下に挙げた例のように勝手に友達が手伝えると決めつけている場合も多かった。

例)不好意思,我明天已经有安排了.我的朋友来帮忙可以吗?

(bu hao yi si. Wo ming tian yi jing you an pai le. wo de peng you lai bang zhu ke yi ma?,

すみません。明日すでに約束があります。私の友達に来て手伝います。いいですか。)

最後に韓国の場合は、「次回」と「紹介」が61.6%と38.4%で、日本語ほどではないが、「次回」が「紹介」の2倍ほど高い。韓国の大学生も他人に負担をかけるよりは自分で解決しようとしていることが分かる。また、前述した英語能力と関連し、韓国語の場合は英語ができる友達を紹介したいという人が12例もあった。ちなみに日本語と中国語の場合はこのような例は1例もなかった。ここに韓国語の例を1つ挙げておく。

例)교수님 죄송한데요, 제가 그런 자리에 참석해본 적도 없고 영어실력이 부족해서요. 오히려 교수님께 민폐만 끼쳐드릴 것 같아서요. 제가 영어 잘하는 저희과 사람들에게 대신 부탁드립니다. 안될까요?(gyo su nim joe song han de yo je ga geu reon ja ri e cham seok hae bon jeok do eo pt go yeong eo sil lyeog i bu jok hae seo yo o hi ryeo gyo su nim kke min pye man kki chyeo deu rir

geos gat a seo yo je ga yeong eo jal ha neun jeo hui gwa sa ram deur e ge dae sin bu tak deu ri myeon an doel kka yo ?

先生、申し訳ありませんが、私がそういうところに参加したこともないし、英語実力も足りません。かえって先生に迷惑になるかと思います。私が英語のできる学科の人々に代わりに頼んでみることはできないでしょうか)

以上をまとめると、全体的に韓国は日本と中国の中間位に位置づけることができる。

5. おわりに

以上で、日中韓の大学生の断り談話の特徴について考察を行った。分析の結果、以下のようなことが明らかになった。

- ①日本と韓国の大学生は断りを言う前に、まず謝罪の定型表現を約1回使っている。
- ②しかし、中国の大学生は26.5%が謝罪の定型表現を1回も使っていない。
- ③謝罪の定型表現は、日本語は「すみません」と「申し訳ありません」、中国語は「不好意思(bu hao yi si)」と「对不起(dui bu qi)」という二つの表現が多用されているが、韓国語は「죄송합니다(joe song hap ni da)」が圧倒的に多く使われている。
- ④断りの理由は「学校」、「個人」、「家庭」の三つに分類したが、日本語は「個人」が8割だったのに対し、韓国語と中国語は「個人」が6割で、その代わり「学校」の割合が3割程度で日本語より高かった。
- ⑤断りの理由を細かくみると、日本語は「用事・約束」が中国語と韓国語に比べ高く、中国語は「テスト・授業」が他言語に比べ高く、韓国語は「願書作成」と「英語能力」が他言語に比べ高い方だった。
- ⑥断りの後の代案の提示の有無についてみたところ、日中は半分程度が代案を提示し、韓国は7割程度が代案を提示していた。
- ⑦さらに、代案の種類をみると、日本語は「次回」が約86%で、中国語は「紹介」が約58%で、日中で大きな違いを見せていた。韓国語は「次回」が62%、「紹介」が38%で日本語と中国語の中間程度であった。

以上のように、今回は日中韓の断り談話の特徴について考察を行ったが、言語使用の男女差については触れることができなかった。今後の課題としたい。

謝 辞

本研究で分析したデータは 2008 年韓国学術振興財団の支援を得て行われた研究(研究題目:韓中日 3 国の異文化コミュニケーションの普遍性と特殊性研究)の一部を用いたものである。

参考文献

- 董青(2005)「中国人日本語話者の断り行動に関する考察-接触場面と中国社会における行動の変化について」『日本語教育と異文化理解』第 4 号、愛知教育大学国際教育学会、pp.55～63
- 金順任(2012)「日中韓の謝罪の定型表現に関する一考察-大学生のアンケート調査を中心に」『日本語文学』53、韓国日本語文学会、pp.23-40
- 李威(1999)「日・中・韓母語話者の『断り』行為の対照研究」『日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会、pp.181～186
- 西村史子(2007)「断りに用いられる言い訳の日英対照分析」『世界の日本語教育』17 国際交流基金日本語センター、pp.93-112
- 大倉美和子(2002)「語用論と日本語教育-メキシコ人と日本人の「誘いを断る発話」」『対照研究と日本語教育(日本語と外国語との対照研究: 10)』国立国語研究所編、国立国語研究所、pp.109-127
- 元智恩(2002)「日本語と韓国語の断り表現の構造 - 指導教官の依頼を断る場面を中心に」『言語学論叢』21 筑波大学一般・応用言語学研究室、pp.21-37